

河野哲也著

『人は語り続けるとき、考えていない：
対話と思考の哲学』

岩波書店 2019年 238頁 四六版 2300 (税抜)

永井玲衣 (上智大学)

本書は、近年教育現場を中心として多くの場で必要性を叫ばれている「対話」について、哲学対話の実践を数多く重ねている筆者が、本格的にその解明に取り組んだ哲学書である。哲学的な対話というのは、主に「子どもの哲学 (Philosophy for children, P4C)」のことを指しており、アメリカの哲学者マシュー・リップマンが、大学生の論理的思考力の低さを憂い、初等教育から思考力の育成を試みたことから端を発している。そこでは、子どもたちが互いの前提を明らかにしながら、意見を出し合い、考えを深める対話型の授業が行われる。この試みは様々な国で展開され、日本にも独自の教育現場や文化と絡み合いながら、今現在も発展を続けている。この現象は、フランスの喫茶店でスタートした、カフェで市民らが哲学的な問いについて語り合うという「哲学カフェ」と合流し、合わせて「哲学対話」と呼ぶのが一般的となりつつある。筆者は哲学者でありながら、こうした「哲学対話」の日本有数の実践家である。だが、本書はそうした哲学対話の実践例に終始するのではなく、そうした哲学的な思考と、対話の関わりから、思考と感情の関係、合理性と非合理性の切り分け、対話する身体についてなど、これまでに哲学対話の実践者が積極的に語ってこなかった「対話」の哲学的考察となっている。対話の教育的意義や、対話のファシリテーション技法について、そして実践の報告なども、実践家にとって大きな助けとなるが、本書のように対話とはそもそも何なのか、何が目指され、思考とどのような関係があるのか、という哲学的な考察が無ければ、その実践は真に「哲学的」とは言えないだろう。本書を通して見えてくるのは、筆者の哲学に対す

る一貫した姿勢である。それは「哲学的とは、自己反省的、自己修復的、自己変革的ということ」(p.186.)という文章に集約されるだろう。昨今の「問題解決」「合意形成」といったキーワードの重要性を認めながらも、筆者は繰り返し、常に自己が問いに対峙しつづけることを言う。安易にそして性急に態度決定するのではなく、「他者と自分自身に相對すること」(p.104.)を強調するのだ。だがそれは単なる決定の保留ではないし、解決への逃避ではない。副題にあるように本書は「対話と思考の哲学」がテーマであるが、対話と思考が行われることによって、自己が変容していくその様子を筆者は丁寧に描き出している。異質な他者との議論を通し、自己は変容し、修正され、変革されていくのである。こうした既存の前提への疑いや自己修正への姿勢は、「無知の知」で知られるソクラテスが対話を街中で行っていたという哲学史的な事実を目を移すとすれば、当然のことと言えよう。「対話」というとコミュニケーション論に考えが及びがちであるが、筆者の考察は「自己論」へと触手を伸ばしていると言える。

また、特徴的かつ刺激的である点として、筆者の「感情・情念」や「身体」への言及である。「情念は思考を動機づける」(p.71.)と述べられているが、「感情」について意欲的に取り組んだマーサ・ヌスパウムの翻訳も手がけている筆者だからこそこの記述だろう。リップマンもヌスパウムの影響を受け、思考に感情的側面を入れ込んだというのは、特筆すべき事実である。さらに「言葉を話すことが、表情や身振り手振りと同じような身体的なもの」(p.125.)というように、思考能力だけでなく身体性にまで議論を深めている部分も興味深い。近代的合理主義の文脈に未だある人にとって、対話という身体を伴った他者との合同行為における思考という視点をもつことによって、さらに「身体性」といった重要な側面に気づかされる。これまでにない「哲学対話」の理論書でありながら、本格的な「対話論」の哲学書である本書は、哲学対話の実践家・研究者や、教育者にとっても、新たな古典となっていくことだろう。